

私の一冊

社会福祉学科 木林身江子 先生

森絵都著 『カラフル』

小鹿図書館 : 913.6/Mo 45 (理論社)

毎年、夏休みが近づくと小学校から推薦図書の案内が配られます。その中でふと目に留まった本が「カラフル」でした。本の紹介欄には、『「おめでとうございます、抽選に当たりました！」天使にこう言われ、死んだはずの「ぼく」は、人生に再挑戦するチャンスを得る。自殺をはかった中学生・真の体にホームステイ(……)して修行を積み、前世の罪を思い出せというのだ。下界に舞い戻ったぼくに、いったいどんな生活が待っているのだろうか……。10年間ティーンの人気No.1のキラキラ青春ストーリー。』と書かれていました。死んだはずの「ぼく」の人生の再挑戦……。私の疲れた頭は、こんなファンタジーを求めていたのでしょうか。早速、小学6年生の長男に聞いてみると、6年生の間でとても人気がある本だと言うのです。私の心は更に浮き立ち、自分のために注文したのが本書との出会いでした。

前世で何か罪を犯して死んだ「ぼく」の魂は、自殺をして亡くなったばかりの14歳の少年、小林真の身体に入り込むことで(天使の業界ではこれをホームステイという)、真が見ることのなかった彼の人生の続きを引き継ぐことになったのです。「ぼく」がまるで別人の体にホームステイするかのように思わせて……。

過ぎてしまった過去を生き直すことはできないけれど、小林真という与えられたステイ先という気楽さから、「ぼく」は自分を縛ることなく、気楽に自由に動くことができたのです。そして「ぼく」は、前世で犯した罪を思い出すまでの過程で、それまで真が気づけなかった周りの世界を見回すと同時に、自分自身を客観的に見つめていくのでした。

内に閉じた心が徐々に開きはじめ、それまで真が思っていたことが誤解であったこと、そして、自分を支えてくれている人の存在に気づいていくのです。「真。やっぱりおまえ、早まったよ。すべてが遅すぎるわけじゃない。おまえが早まりすぎたんだ……。」と胸の奥で強く叫ぶ「ぼく」……。真の無念を想うと私まで悔しさが込み上げてきて、どんどん物語の中に引き込まれていくのでした。

そして「ぼく」は、真の進路の問題、家族との関係、異性や友人との関係、そして真という人間について考える過程で、これまで見えていた一色の世界がいろいろな色に彩られていることを感じとっていきます。周囲の人々のそれぞれの表面的な人間像、それぞれの内面、また自

分が置かれた状況に対して、ちょっと角度を変えて眺めたり丁寧に振り返って見ることで、今まで見えなかったものが見えてきたのです。きれいな色も汚い色も、明るい色も暗い色もあり、皆いろいろな絵の具を持っていて、自分でも気づかないところで、誰かを救ったり苦しめたり、誤解したりされたりしながら生きている、そう、この世界があまりにカラフルだということに気づかされるのです。そして「ぼく」は、前世に犯した罪を思い出していくのです。

この作品には、人それぞれが自分らしく生きるヒントが詰まっています。

人は皆、多彩な人間のなかで生きているのだということ、そして自分自身も色々な色を放ち、人を刺激し刺激され反応しながら生きているということ、そして個と価値観の多様性をおぼろげにでも理解することで、自分自身の色も見えてくるのだと思います。

それから、人生に少し疲れを感じたら、天使が言ったことばを思い出すといいです。「せいぜい数十年の人生です。少し、長めのホームステイだと気楽に考えればいい」と。気楽に生きることで気づくことがあります。少し離れた所から眺めることで気づくこともあります。ふだん気づかないほどの小さな幸せに改めて気づくことで、気持ちも軽くなるでしょう。

本書は、児童文学でありジュブナイル小説の枠に置かれていますが、作者特有の巧妙に敷かれた伏線は実に素晴らしく感動的で、大人が読んでも十分に楽しめます。ちなみに森絵都作品は、1990年「リズム」で講談社児童文学新人賞と椋鳩十児童文学賞を受賞、94年『宇宙のみなしご』で野間児童文芸新人賞と産経児童出版文化賞ニッポン放送賞、96年『アーモンド入りチョコレートワルツ』で路傍の石文学賞、98年「つきのふね」で野間児童文芸賞、99年「カラフル」で産経児童出版文化賞、2003年「DIVE!!」で小学館児童出版文化賞、その他著書多数あり中学生が主人公の作品が多い中、06年直木賞を受賞した「風に舞いあがるビニールシート」の主人公は大人です。どれもテンポの良い語り口で読みやすく、いつのまにか登場人物たちの生きる世界に引き込まれてしまいます。ぜひ読んでみてください。